**【課題】**

**「平家物語」には、和歌にかかわる」という有名な話があります。「百人一首」の歌人たちの人柄や、歌の背景を知ると、より深く和歌を味わうことができます。学習コンテンツ「百人一首の世界」を活用して、あなたの好きな歌について紹介しましょう。**

**「平家物語」と和歌（「平家物語」巻第七から『忠度都落』）**

はどこから帰られたのであろうか、五、一人、それに自分を含め七で引き返し、五条のの屋敷を訪ねてみると、門を閉ざして開かない。

「忠度です。」

と名乗られると

「が帰って来た。」

と言い、そのうちぎになった。薩摩守が馬から降り、大声で言われるには、

「特別の理由があるわけではありません。（俊成）に申し伝えたいことがあって、忠度が戻って参りました。門を開けらなくてもよい、近くまで来ていただきたい。」

と言われると、俊成卿は

「来られる事情がおありなのだろう。その人ならば問題ない。門を開けて、入れてさしあげろ。」

と門を開けて対面した。様子がなんとなくれであった。薩摩守は、

「ここ何年もの間、歌のことについてご指導願い、お教えいただいて後、決しておろそかにしておりませんでしたが、この二・三年は京での騒ぎや、各地での動乱など、すべてわが平家の身の上のことでございますので、をなおざりに思っていたわけではないものの、なかなか参ることができませんでした。わが君（安徳天皇）はすでに都を出られました。平家の運命も、もう尽き果てたようです。のがあるとの話をうかがいまして、生涯の名誉に一首でもごをこうむり、入れていただこうと考えておりましたのに、すぐに世は乱れてしまい、編纂も中止となったことは、私にとって本当に大きなきです。この後、世がまって勅撰集の編纂が行われることもございましょう。ここにある巻物の中にふさわしい歌があれば、一首なりとも推選いただいて、のでうれしく思うことがありますならば、あの世から末長くあなたをお守りしたいと存じます。」

と、いざというときのために持っていた、日頃詠まれた歌の中からと思われる百余首ほどを書き集められた巻物を、の合わせ目から取り出して、俊成卿に手渡した。

俊成卿はこれを開けて見て

「このようなをいただいたうえは、決して粗末にはあつかいません。それにしても、ただいまこのようにおしいただいたのは、も非常に深く、しみじみとした思いが感じられて、涙をおさえきれません。」

と言われると、薩摩守は喜んで、

「もはやの底に沈むなら沈んでもよい、をにさらすことになっても、もうこの世に何も思い残すことはありません。では、お別れを申します。」

と、馬にうち乗り、のをしめ、西に向かって馬を歩ませられた。俊成卿が後ろ姿をはるかに見送って立っていると、忠度と思われる声で、

「し、思いをのの雲にす」

　【これから先の道のりは遠い、思いはこれから越える雁山の夕方の雲に飛んでいる】

と高らかに口ずさまれたので、俊成卿はますますしく思われ、涙をこらえて戻られた。

その後、世がまって、を選ばれることになったとき、ありし日の忠度の姿や言い残していった言葉などが、今あらためて思い出されてもの悲しく、あの巻物の中には、入集にふさわしい歌がいくつもあったが、忠度はにされた身なので、名前をのせられず、の花という題で詠まれた歌一首だけを、「み人知らず」として入れられた。

　　さざやの都はあれにしをむかしながらの山ざくらかな

　　【志賀の旧都は荒れてしまったが、の山桜は昔そのままだなあ】

その身がとなってしまったからには、とやかく言えないが、悲しく残念なことであった。

・薩摩守忠度…平忠盛の六男。平清盛の異母弟。武芸だけでなく、歌人としても優れていました。

一ノ谷の戦いで討死しましたが、その箙（えびら）には歌が結び付けられていたといいます。

・藤原俊成…藤原定家の父。後白河院の命による「千載和歌集」の撰者。五条京極に邸宅がありました。俊成は「百人一首」**８３**番の歌人です。

・「千載和歌集」…成立は文治三年(一一八七)。忠度の歌は春上に「故郷花といへる心を詠み侍りける」と詞書があります。なお「新勅撰和歌集」以降は薩摩守忠度の名で歌が選ばれました。

・志賀…滋賀県にある琵琶湖南部西岸。長等山は琵琶湖西岸の山。